8B-7 no.57

図書資料番号
No. 35044

昭和四十七年度働く青少年の生活文
内閣総理大臣賞・労働大臣賞受賞作品より

労働省婦人少年局

13p

目次

内閣総理大臣賞

私の生きがい　京都府　西野誠一　電路工（二七年三月生）　（1）頁

労働大臣賞

私の仕事　兵庫県　湯口千里　織布工（二四年八月生）　（3）

私の生きがい　福島県　木幡英光　郵便配達員（二六年七月生）　（6）

糸をだいた青春（詩）　東京都　宇都宮里志　研究所（二四年七月生）　（10）

おっ母あへ（詩）　徳島県　柏木秀夫　塗装工（二二年八月生）　（12）

私の生きがい

西野誠一

今や技術の進歩には目を見張るべきものがあります。現代のエネルギー源ともいうべき電気は、多くの人びとの血と汗の結晶により開発され、これによって今日の豊かな文明社会が展開されている訳ですが、私の仕事はこの電気を無事に家庭まで送り届けられるよう保守する事が私の仕事です。

黒部の山奥の水力発電所から、あるいは工業地帯の火力発電所から、野を越え山を越え、はるか遠く先輩諸氏の苦労によって起こされた電気は、家庭内に入れば安全で便利なエネルギーですが、無事に家庭内に入り込むまでには、並々ならぬ人力が、かかっている訳です。

私の仕事は、変電所と云う所から一般家庭に入るまでの電線の保守ですが、電柱何百本、何百キロという行程の保守ですから、たとえ雨だろうが、雪だろうが関係ありません。一分でも一秒でも停電しないよう、常に神経をとがらせていなければなりません。ましてや、高電圧電線と常に取組む仕事がおもで、作業場所は、街路であれ山奥の谷間であれ、電柱の上の、全く危険な上に危険な仕事ですので、一瞬の油断もスキも許されません。この仕事に就くまでは、三か年の教育期間がある訳ですが、最初は電柱に昇れるという嬉しさで、恐しいとも何とも感じませんでした。まして教育期間中ですので電線には電気が流れておらず、身の危険等は全くと云って良いほど気にもせず勉強していました。三か年の教育を終え正社員となり、現場第一線に配属され、対需要家関係、また市内における電気の重要性、電気の恐しさと云うものを肌で感じる事が出来ました。

現在では、現場作業も機械化の導入等で、作業自体も早く、しかも便利で安全な方法を取り入れ、現代が要求する迅速かつ広範囲な作業と取り組んでいますが、今日の作業技術は、幾人もの先輩諸氏の犠牲、体験と努力

のお蔭で築かれた訳です。我々としては、この貴重な何十年間かの資料、工事方法等を大いに活用させて頂き、更に改良工夫を加え、自らをいましめ、電気のプロとしての精神を引継いでいきたいと思っています。現在住んでいるところは軍港で知られた舞鶴ですが、年々家屋増築は進む一方で、私達の仕事もそれに伴い、ますます忙しくなってきております。電柱や電線は、ほうっておいても頑丈そうだから別に大丈夫、電気はいつもついてるじゃないか、何が忙しいんだ、などとよく思われ勝ちですが、雷、台風、樹木接触、自動車の電柱破壊等々、最悪な条件が、昼夜の区別なく存在しており、保守員達は、日夜この条件の除去に努めております。

教育期間中は、電気販売という事がピンとこず、「性に合わないし、やめようか」、などと、何度も悩み、今から思えばフラフラと軽卒な毎日を過しておりました。七十年春、当地舞鶴に来て、保守という仕事が私の使命感を大いに湧きあがらせました。思えば、この二年余、来る早々山奥の一部落の大半が火事に見舞われ、火と水の中を狂気の人どみをかきわけ、点燈に従事した事、夏太陽の直下、直黒な顔に汗の滝を作り、塩で固まった作業衣で、線路防護した事、台風時、豪雨の中を宿直者三人で断線修理をして、工事終了後最後の柱上スイッチをいれたとたん周囲の家々の窓から光る電灯のきれいだった事、積雪時、降雪で見えぬ頭上を震える身体をしかりながら事故原因の除去作業をした事等、電気屋としての喜びにひたりきれたことは、私にとって幸福な年月でもあり、素晴しい人生の一ページであったと思います。やはり私達の一番の喜びは、事故がないことはもちろんですが、天災等による事故停電後、作業完了し、電灯がパッ、パッ、パッ、とつくあの時が何と云ってもたまらなく嬉しく思います。今でも、年末三十一日の柱上で聞いた除夜の鐘の音が、「ゴーン、ゴーン…」、と耳に伝わってくるようです。「恐しいでしょう」と、よく人に質問されますが、私は、保護具に身を固め、柱上にて、高電圧電線に一動作一動作、張りつめて、自問自答しながら作業する時の自分が大好きです。

常に危険と肩を並べている訳ですが、やはりそれだけにやりがいと云うものがあります。今後の自分の健康には十分注意し、プロとしての責任と自覚を持ち、この舞鶴の燈をたやさないよう、私の青春を大いにぶつけたいと思っております。

終

私の仕事

まさか失敗するとは思っていなかった県立高校入試に失敗し、私立高校への願書も出しておらず、他に進む道も考えていなかった私が、「故郷の発展の一員たれ」と言う現在勤務している会社の社長さんの熱心な勧誘と、人柄にひかれ、又何となく都会には馴じめそうもない気持ちから、ちりめんの着物を生産する会社に勤務して七年になります。

入社して一年は、たて糸とよこ糸を作る糸ごしらえの仕事でしたが、くるくるまわる機械に追いまわされ、何を考えることもなく無我無中であまり苦にならず過ごしました。二年目からいよいよ製織の仕事にまわされ、

先輩から機織を教わることになりました。三千八百余本のたて糸によこ糸の入った杼が左右に動き反物が織れるのですが、一本の糸の乱れも必ず製品にひびく程細かい仕事です。織機を動かすには、細心の注意が必要で、自分ではどこも点検したつもりでハンドルを動かしても、習いはじめの頃は、杼が飛んでどきっとしたり、織りついてたて糸が切れてしまいました。その度に、先輩に注意され、トイレにかけこんで思わず声をあげて泣いたことも度々でした。仕事を終えて帰宅しても夕食もとらず、ふとんをかぶってねむってしまい、家人を心配させました。

でも翌朝、同じ会社に準備部主任として勤める母が、「元気を出しなさい。誰も失敗をしながら織れるようになるのだから。」と言って家を出かけた後、思い直して飛び起き出勤したこともありました。

ただあいた管を替えてキズが出来ていたら機を止めて先輩を待つだけしか出来なかったのが、二カ月もすると、キズが出来てもほどいて織合わせをし、たて糸が切れても、つなげるようになり、先輩の助けを借りずに自分で一反全部織れるようになりました。

こうして四台の織機の責任を持たされ、美しい製品の仕上がりを手にする喜びに、元気に通勤していましたが、私と一緒に習い始めた友達は、とうとう途中で二人ともやめられ、会社には、若い頃覚えた腕を生かして就職された四十才前後の人達ばかりで、心を打ち明けて語り合う友達がありません。進学したり就職された友達にたまたま逢っても、それぞれが楽しそうで、自分だけがつまらないように見えて仕方ありません。母と同じ年配の人達ばかりの中で働かなくてもという気持ちが、むくむくと頭の中を持ち上げ、今の仕事まで自分に適していないように思え、職を変えてみようか、思いきって都会に出てみようかと真剣に考えました。しかし、その都度母が、一体自分にどんな適した仕事があるのか、今の仕事が満足にできない者が、他の仕事をしても

結局は同じ事。自分に出来る仕事は、たった一つしかないし、それをやり通してこそ喜びがあると、さとし、励ましてくれ感謝しています。

毎日、心をこめて織りあげる反物も、全然自分とは関係ないものと思っていましたが、成人式が近づいた頃社長の奥様に、成人式に晴着をこしらえてはと、美しく染め上がった振袖を何枚か見せていただきました。それまで、洋服で出席するつもりでしたが、やっぱり私も女の子です。緑のぼかしに、くっきりと梅の古木を描き、ほんのりと恥ずかしげな紅梅がにおうような振袖を見て、矢もたてもたまらず、着てみたくなり新調しました。成人式当日、母に着付けしてもらいながら、鏡の中の自分が、急に女らしく美しく見え、早くクラスのお友達に会いたい気持ちで一杯でした。一人前の人間として祝福される式に、自分の手で織った振袖を身につけた喜びは、美しく着かざった友達の誰よりも大きく、この仕事を得た喜びと誇りでふくらんだ胸を、ちりめんの快よい感触がやさしくつつんでくれました。母の嬉しそうな鏡の中の顔を思い出しながら、ふと、着物は女の一生にとって、その一枚一枚が、思い出とつながってくることに気づきました。次に私が振袖を身につける時は、きっと結婚式の時でしょう。一昨年、祖父が亡くなった時は、母も私も、喪服を着て、悲しみをこらえました。

着物姿が美しいのは、その人の喜び、悲しみ等、心をあらわすからでしょうか。母が、たんすの中から着物を出す時、何とも言えずなつかしい顔をするのは、これまでの人生の思い出をたぐるからでしょうか。

ただちりめんの生産をしてその代償として給料をもらうという、何のへんてつもない青春に終ってしまいそうだと仕事に対して不安な気持ちも、成人式以来、ふっとび、自分の生まれ育った町の産業に従事でき、この仕事を得た喜びと誇りで、自分にも自信が持て、少しでも、良い製品を生産できるよう、努力しています。

年に一度の社内旅行も、お昼休みの卓球やバレーボールの遊びも、心から楽しく、又、友達とも学生の時と同じ対等の気持ちで接することが出来るようになり、明日への仕事のエネルギーを養うべく、余暇も利用しています。

ただ、私より若い人が会社に少ないことがさみしく、これでは、郷土の産業の発展も考えられないので、若い人の入社を心より待ち望みつつ、常に自分に厳しく、毎日の仕事に励んでいます。

私の生きがい

木幡英光

私の住む飯館村は、県都福島市より東の方へ約四十キロほど入った北部阿武隈山系の中央に位置し、人口九千人余りの農村である。農林業が主産業で村には他にこれといったものもなく、近年の社会の高度成長とともに、若者は都会へ都会へと村を離れ村の人口も年々減少してきている。そして、ここ数年前からは、それまで冬の男達の仕事として盛んだった木炭生産も時代の流れとともにすっかり衰ろえてしまい、農閑期ともなると男達のほとんどが出稼ぎへと村を出て行ってしまう。村の冬は一家の主人のいない留守家族だけとなる。

このような村での私の仕事は、村内の郵便局に勤務する郵便配達という仕事である。高校を卒業すると同時に入局し、まだ二年にもみたない新米の郵便配達員である。農家の長男に生まれた自分であったが、農業経営規模の小さな私の家の実態では、どうしても農業だけで生活していくということは困難だと考え、郵便局に入局した。家族の強い願望や、自分のおかれた立場などから、ただ漠然と選んでしまった自分の仕事に対して、

初めの頃は多くのためらいもあったが、部内の研修や職場の上司や先輩達と生活をともにしていくうち、自分の仕事というものに対しての誇りや、意欲さえももてるようになってきて、今では、充実した毎日を送っております。

郵政事業、それは、日常の国民生活からは切っても切り離せない、大切なサービス事業である。全国均一の、しかも低料金で全国の津々浦々まで迅速、安全、確実に郵便物を届ける郵便事業。

全国津々浦々という言葉を使いましたが、私のように山間へき地でその仕事にたずさわっている者には、それがつくづく実感として感じられるのです。都市部と違って、農村は、家が大変閑散で一軒家という所がたくさんあり、一軒の家に行くのに多くの時間を費して配達する。天気がよくて道路の状態などがよい時はまだいいとして、それが雪や雨のためにそこまで歩いて行かなければならないような時などはこの事が強く実感として感じられるのです。

私の村は、海抜が四百五十～六百メートルもある高地にあり、冬ともなれば一尺以上の降雪も珍しくない。私達外務員にとって十一月下旬から四月初旬までの冬期間は全くいやな時期である。この時期ともなると雪ばかりではなく凍みどけもある。だからこの時期には機動力が充分に使われなくなってくる。雪が降ればもちろんであるが、雪がなくても大きな道路以外は道が悪くて機動車が入れず、小さな道路や家から道路に出るまでの道などはほとんど歩きとなってしまう。重いカバンを背負い、長い道を歩くと体中が汗のために濡れてくるのがわかる。そんな時の自分の心にはもう何もない、ただ自分との闘いだけがある。私達郵便外務員には一枚の葉書でもそこがどんなに遠く道が悪い所であっても、その郵便物をあて所まで配達する義務と責任がある。朝、局で配達に出る前の「道順組み立て」をしていて、郵便物の中に不便な所に郵便物があるような場合、内

心本当にいやだなあと思う時がある。しかしこれが自分に与えられた仕事であり、任務で、この郵便物を受け取って心から喜んでくれる人がいると思うとそんな気持もどこかに飛んでいってしまう。そして、郵便物を渡した時、お客さんから「ありがとう」、「御苦労様」、という言葉を聞いた時、それまでの疲れなどは一瞬のうちに消え去ってしまうのです。人間は、よく感情の動物などと言われるが言葉という人間の意志の伝達物がこれ程までに相手の気持をなごませてくれるものだという事を、私は、郵便配達員になって初めてわかったような気がする。

冬期六か月というと一年の半分にあたる訳であるが、出稼ぎに行った人達の送金は、そのほとんどが現金書留で送られてくる。村に残された家族は、この送金によって生活をまかなうのである。それだから、この送金は、家族にとっては何よりも待ち遠しいものである。事実私の父も現在出稼ぎに行っている。父が出稼ぎに出るようになったのは、数年前からであるが、小さい時から父のいない半年というものを、これまで、経験してきた私には、残された家族の心境というものがよくわかるのです。

出稼ぎ問題は、今や大きな社会問題とまでなっている事は周知の通りですが、このような大きな、また、困難な問題を私一人位の力などではどうすることもできないことは百も承知ですが、私はこの問題が自分の身近な問題として、せめて郵便配達という仕事を通していくらでもそのことに対して奉仕の念を持ち続けたいと思っている。仕事柄、出稼ぎ先からの送金、つまり現金書留の本数というものが多くなってくる時期が大体わかる。それは月初めか月末に集中するようである。この時期ともなると郵便を配達していて道ばたなどで家族の人と行き会ったりすると、「そろそろ来る頃なんだが、今日はきていないだろうか。」などという問いかけを受ける。あいにく持っていなかったような場合は「明日くるかも知れませんよ。」などと話してくる。家を離れ家

族を残し遠くに出稼ぎに行き、苦労してお金を送る人、またそれを待ちわびてそのお金を受け取る家族の人、私の仕事はその中間に入ってそれを受け渡す中間的な仕事であるが、私は、この仕事に誇りと生きがいを感じている。郵便物を渡しての帰り道、よく思う事は、誰もが出稼ぎなどしないで家族全員が、楽しく暮らす事ができたらなあということである。そんな日が一日も早く私の村にもくる事を夢見て、私は、今日も雪と悪路の上を歩き続けている。

糸をだいた青春

―　Aにおくる四章　―

宇都宮　里　志

＜1＞

はたらくあなたをみた
ひかる汗と
ぴんと張った青春をみた
糸をだいたあなたをみた
ワインダーのかげに
泉のような微笑をみた

＜2＞

机にむかってぼんやりしていると
窓に月がうかんできました
うすらあおいガラスは湖水のようです
まだ　はたらいているあなた
工場のうえの月
あなたの肩に　あなたの髪にまつわる糸くず
月はのぼっていきます
あなたがかえってくるころには
あの煙突のたかさになるでしょう
あとひといき……
わたしはリーダーをひらきます

＜3＞

明け方　あたたかい雨が
この地方をぬらしたことを
うっすらとおぼえている
それは　ちょうど
あなたが工場へむかう時刻だ

屋根をうつ雨の音はいつしかやんで
めざめたときには
糸杉のあおい炎がゆらめいていた
それはまっすぐ
あなたの工場までつづいている

明るい窓辺で出勤の仕度をしながら
わたしはまいあがる白い鳥のむれをみた
工場のむこうの海のあたりに

〈4〉

秋の日　バスにのった
あなたと丘へいこうというのだった
海べりをバスは走った
バスは満員で
わたしたちはきゅうくつなおもいをして
つりかわにつかまっていたけれど
わずかなすきまから
ながれる海をみることができた
わたしたちはむかいあって　よりそって
いなければならなかった
だれにも知られず
はなしつづけることができた
はじめてあなたの髪をかいだ
丘はとおかったので

あなたはながいあいだ
胸のなかでささやきつづけた

おっ母あへ

柏木秀夫

今日もおっ母あと言い合っている
これについての言い合いはこれで二度目
去年の今ごろも大阪へ行け、行け、と言われた
あんまりひつこいので
横へ向いて取り合わなかったら
いつとはなしに　やまってしまった
それがまた　今年もヤンヤ、ヤンヤ、と言いだ
した。
弟が大阪から帰ってくるときまって
「お前も大阪へ行け。行くんだ」と言う
でも僕は、絶対今の所を動きはせん

おっ母あよ
僕が　ここへはいった時のことを思い出してお
くれ
返事一つするさえ　はずかしかった僕を
へマばかりして長い間仕事が手にはいらなかった
僕を「荷造りや、掃除ばかりしていたのでは…」
と一番やりたかった塗装の方へ抜てきしてくれ
たんだ
僕もしゃにむにやったけれど
あれから三年
今　僕は　第二塗装室の責任者
僕の所を通らないと
僕の塗装が悪いと
毎日流れる数十本の仏壇ができんのだ

おっ母あよ
弟は、施設出だけど
金をたくさん送るから　いつでもほめるんだね
しかし　あいつだって　どうせ一生僕が　面倒
見てやらないかんだろ
そのためにも僕はシッカリしとらないかんのだ
都会にくらべ　いなかは給料はやすいけど

今の僕は　お金のことだけで考えてはいかんと
思うんだ

なあおっ母あよ
長男の仕合わせを思ってくれていること、
おやじがなくなってからは　一段とたよりにし
てくれていること
僕なりに　みんなみんなわかってるんだ
口べたで　何にでも「ハイ」、「イイエ」しか
言わんくせになってしまった僕
だからあまり、グタグタ言わんけど
なあおっ母あ、おやじの分も合わせて
キットキット孝行してあげるよ
だから、だから
もう「大阪へ行け」と
言わんといてなあ